

故・瀬戸正美会員の遺稿集に寄せて

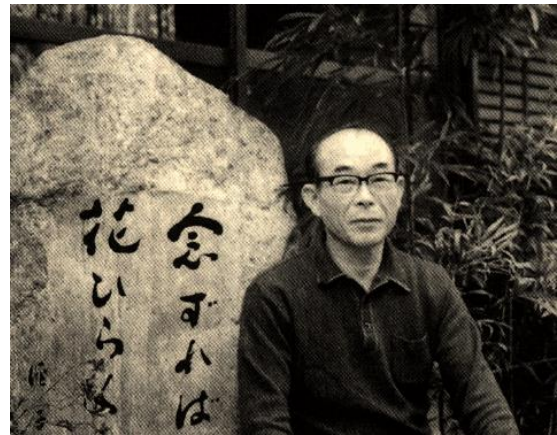
この夏、故・瀬戸正美会員の遺稿集「念ずれば花ひらく」が、ご遺族によって出版されました。「念ずれば花ひらく」は、生前に瀬戸氏が好まれた坂村真民の詩の題名である。

奥様の徑子様による編集による遺稿集には、瀬戸氏の作品である能面のカラー写真、高知新聞に連載された論説、高知県技術士会会報や高知県正昭会会誌に投稿された論文等が 340 ページにわたって綴られている。豊富な知識と卓越した文章力は、読者を夢中にさせる。書店で販売すれば、ベストセラーとなる内容の本である。

高知県技術士会を発足したのは 18 年前の 1986 年で、当時の会員は、瀬戸氏を含めわずか 15 名であった。年 2 回の会合には必ず出席され、趣味の面打ちの話、土木技術者としての心構えなど示唆に富む話を披露して頂き、いつも興味深く聞き入っていたことが懐かしく想い出される。最も面白かったのは、自分の頭を実験台にして研究されたという毛はえ薬の話であった。

当会では、1989 年に高知県技術士会会報 VOL.1 を発刊し、以来毎年発行している。「土木技術とは」、「環境の輪を切るな」、「河川のこの未知なるもの」、「たわごと」、「砂漠の知恵」、「高知県の水問題について」、「阪神大震災五つの疑問」、「河川この未知なるものⅡ」、「河川この未知なるものⅢ」、「コンサルタント技術者のあり方について」、「人間よ驕るなかれ」、「ダムをムダと言う訳」。会報に掲載されている瀬戸氏の論文である。

論文では、今、世間で話題になっている自然環境破壊、技術者倫理問題を早い時期から取り上げ警告されている。「土木工学は足の裏の工学だ」、「現場は、自分の足で歩いて、地球の凹凸を足の裏で感じることで、本当にわかる」という経験に裏打ちされた言葉には説得力があ



る。肝に銘じておかなければならない。

瀬戸氏は 1996 年 5 月から 2000 年 2 月までの間、27 回にわたり高知新聞の「新聞を読んで」のコラム欄に「県技術士会会員」の立場で執筆された。世の中の出来事を土木技術者の視点から分析して書かれた鋭い論評は、多くの読者の心を惹きつけた。

今年の 6 月、チャットでのトラブルが原因で発生した「長崎少女カッター殺人事件」は記憶に新しいと思うが、瀬戸氏は 1999 年 8 月 29 日掲載の記事で、「小学生が最高の教育者である自然を離れて、パソコンの前に座り続ける姿を想像すると、空恐ろしい気がする」と、この事件を予言することを書かれている。

投稿先は不明だが、1995 年 6 月 20 日に書かれた行政改革と題する論文では、「高知県行政総合研究所の存在は行政改革に逆行するものと思われてならない」と述べられている。今年の 9 月、橋本知事は県の財政危機を理由に、県政策総合研究所を本年度末で廃止すると発表した。瀬戸氏の的確な状況分析能力と洞察力には驚嘆させられる。

高知県技術士会の発展に大きく貢献された瀬戸氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

高知県技術士会代表幹事 右城 猛